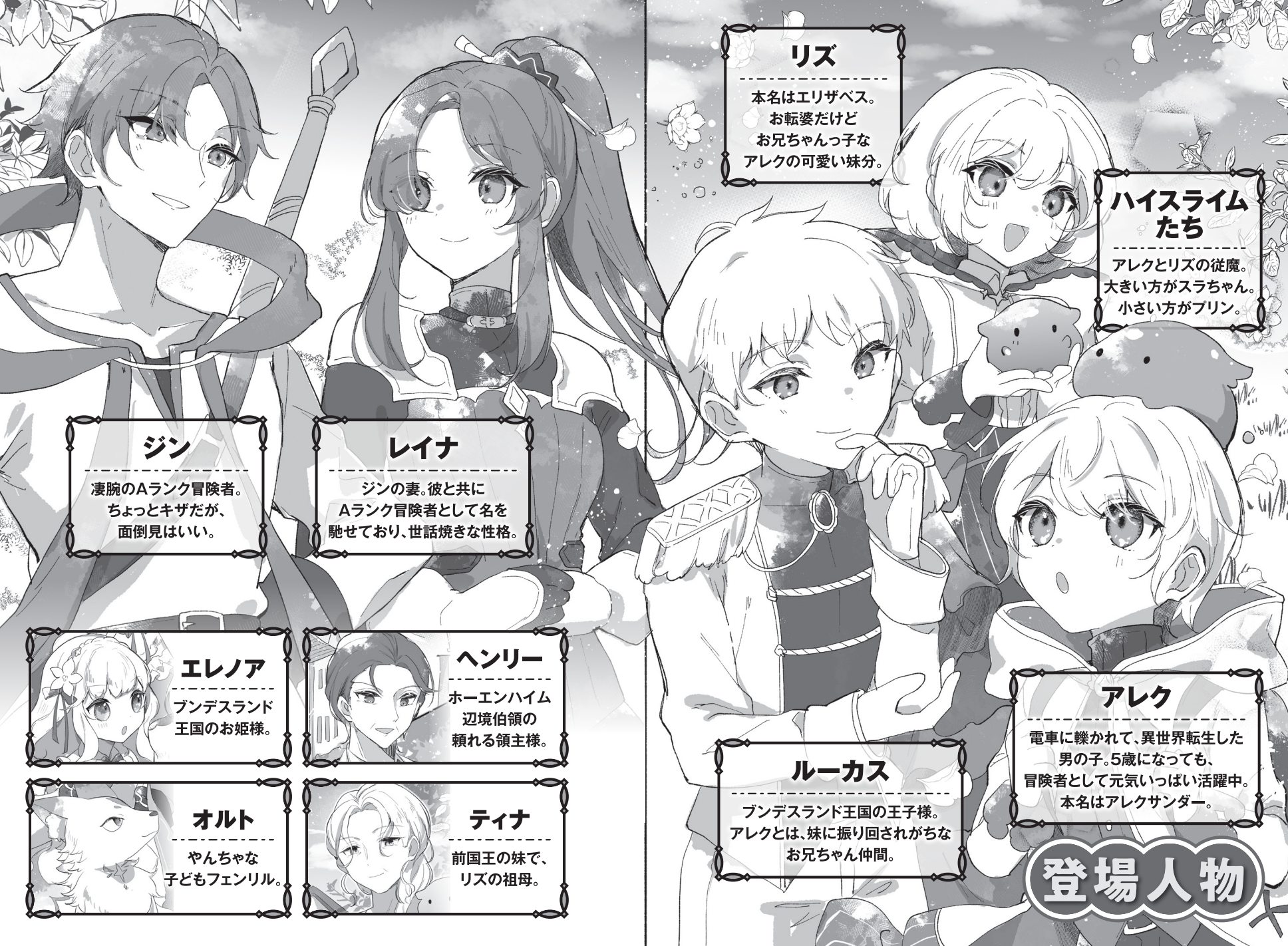
転生しても実家を追い出されたので、今度は自分の意志で生きていきます 5

tensei shitemo jikka wo oidasaretanode kondo ha jibun no ishi de ikite ikimasu

Nagomi Fuji
著 藤 なごみ

ill. 呱々唄七つ


登場人物
ジン
凄腕のAランク冒険者。
ちょっとキザだが、
面倒見はいい。
レイナ
ジンの妻。彼と共に
Aランク冒険者として名を
馳せており、世話焼きな性格。
エレノア
ブンデスランド
王国のお姫様。
ヘンリー
ホーエンハイム
辺境伯領の
頼れる領主様。
オルト
やんちゃな
子どもフェンリル。
ティナ
前国王の妹で、
リズの祖母。
リズ
本名はエリザベス。
お転婆だけど
お兄ちゃんっ子な
アレクの可愛い妹分。
ハイスライム
たち
アレクとリズの従魔。
大きい方がスラちゃん。
小さい方がプリン。
ルーカス
ブンデスランド王国の王子様。
アレクとは、妹に振り回されがちな
お兄ちゃん仲間。
アレク
電車に轢かれて、異世界転生した
男の子。5歳になっても、
冒険者として元気いっぱい活躍中。
本名はアレクサンダー。

第一章　辺境伯領での五歳の祝い、新たな命の誕生

バイト帰りに電車に轢かれて命を落とした僕が、異世界の赤ちゃん・アレクサンダーに転生してから五年以上が経った。

母親に捨てられて一人ぼっちだった前世と違い、今生の僕にはいとこであり妹分のエリザベス――リズや、従魔であるハイスライムのスラちゃんやプリンといった心強くて賑やかな家族がいる。

赤ちゃんの頃から一緒だったリズはこの数年で大きく成長し、いっそう明るくなった。が、ちょっとお転婆なところが玉に瑕なんだよね。

特にスラちゃんと一緒になると、もう止められない。二人して何をするのかと僕も目が離せなくなる。

さまざまな経緯を経て、実家のバイザー伯爵家を乗っ取った叔父夫妻を倒したのが一年ほど前のこと。

現在の僕たちはブンデスランド王国のホーエンハイム辺境伯領領主、ヘンリー様の庇護を受けており、用意してもらった新しい屋敷でみんなと暮らしている。

これにはリズの実の祖母であり、前国王の妹であるティナおばあ様の力添えもある。彼女は僕たちのことを穏やかに見守り、何かあれば一緒に行動してくれるんだ。ヘンリー様に続く、第二の保護者とも言えた。

まだ幼い僕たちにとって、ティナおばあ様はなくてはならない存在だ。

僕の屋敷には、叔父夫妻に育児放棄されていたところを保護したいとこ――ミカエルもいる。

それに侍女のチセさんや、フェンリルの子どもであるオルト……彼らもまた、僕の家族と呼べる人たちだ。日々著しい成長を見せる元気なミカエルを中心に、屋敷はどんどん賑やかになっている。

今年の春、僕は大きな戦いを終えた。

僕を敵視していたブッフォンがお隣のガイアード共和国で起こしたクーデターを、リズと阻止したのだ。

ただ……その際、闇ギルド有数の実力者――ナンバーズである、ピエロとドクターなる人物が暗躍している様子を目撃した。

彼らはティナおばあ様の旦那さんを殺した、因縁の相手。何やら怪しげな企みをしているようだったから、どうにも気が抜けない。

春から夏にかけては、お祝いごとも相次いだ。

いつもお世話になっている王妃様たち……ビクトリア様とアリア様の妊娠が判明したせいで、ドタバタだった国王陛下の誕生日パーティー。

隣国、アダント帝国のランベルト皇帝のところに双子が生まれた時は、みんなで赤ちゃんを見に行った。

さらに、冒険者として活動する僕とリズの師匠である、ジンさんとレイナさんの結婚式のお手伝いまでして……楽しかったなぁ。

王国の直轄領である港湾都市で大規模な不正が発覚し、それをきっかけにロンカーク伯爵家の乗っ取り事件が分かった時はヒヤヒヤしたけれども。当主だった両親を殺され、偽ロンカーク伯爵に従わされていた少女――サンディを保護し、事件は解決した。

偽ロンカーク伯爵を捕らえた今、こちらのサンディという子が伯爵家を継ぐことに。

しかし……彼女はまともな勉強をさせてもらえていなかったうえに、まだ幼い。

サンディ救出作戦に参加していた僕とプリンに心を開いてくれているので、当面は心のケアをしつつ、僕たちと共に勉強に励むことになった。

新しい人が増えて、ますます賑やかな僕の屋敷。

神聖なイベント――五歳の祝いも近づいてきたし、みんなが笑顔で過ごせるといいな。

◆　◇　◆

夏から秋への季節の移り変わりを告げるかのような、過ごしやすい気温のある朝。

「えっほ、えっほ」
「アンアン」
「おー！」
僕の屋敷の庭では今日も今日とて、ミカエルが仲良しのお友達――オルトと、元気よく腕を振りながらお散歩していた。
来年で二歳になるミカエルは動くのが大好きで、いつもオルトと屋敷の中や庭を歩いている。
さすがに幼児と子狼だけにはしておけないので、必ずミカエル付きの侍従がそばに控えているんだけどね。
今朝はミカエル付きの侍従に加えて、僕とスラちゃん、プリンがミカエルを見守っている。
僕の庭の、いつものにこやかな光景だ。
ミカエルが満足するまでお散歩したところで、玄関の扉が開く。
「ミカちゃん、そろそろお家の中に入ろうね」
リズがミカエルに声をかけた。
彼女の横には我が家に滞在中のお客さん――サンディもいて、一緒になってミカエルのことを手招きしている。
トトト、ポス。
「りじゅねーね！」

ミカエルは小走りでリズのほうに向かい、彼女の足にガシッと抱きついた。
そのまま、にへーっと笑ってリズのことを見上げている。
「ふふふ。ミカちゃんは、本当に甘えん坊だね」
リズが身を屈め、満面の笑みを浮かべてミカエルを抱きしめ返した。
ミカエルはどんどん言葉を覚えてきていて、最近では僕たちの名前を言えるようになった。
「アオン」
一方、オルトはサンディのもとへ。
「ミカエルのことをきちんと見守りました」と尻尾を振りながら彼女の足へスリスリしていて、サンディはにこやかにオルトの頭を撫でていた。
楽しそうなみんなのところに、僕、スラちゃん、プリンも近づく。
「じゃあ、そろそろ着替えて王城に行くよ」
「「はーい」」
「あい！」
「アオン」
僕のかけ声に、リズとサンディだけでなく、ミカエルやオルトも元気よく声を上げた。
スラちゃんとプリンも触手をフリフリして返事をしている。
実は今日、あるイベントが僕たちを待っているのだ。

僕やリズ、サンディ、この国の王女様であるエレノア……つまり、今年五歳を迎えた者たちが参加する最大の行事、五歳の祝い。

お祝いの日が近づいてくるにつれ、僕たちに「ぜひお茶会にいらしてください」というお招きがかかるようになってきた。

しかし、その中には「お茶会として屋敷に招待し、自分の子どもを僕やリズの婚約者候補として紹介してやろう」という下心がみえみえな貴族の誘いもあった。

そういった申し出はティナおばあ様がすべて確認し、却下してくれている。僕だって、そんなお茶会には参加したくない。

今日は、ティナおばあ様の厳しい審査をくぐりぬけた、数少ない貴族家のお茶会に参加することになったのだ。

せっかくのお招きなので事前に許可をもらい、サンディ、ミカエル、オルトといった屋敷の面々も一緒に行く。

残念ながら、エレノアは王城で王妃様と共に来賓対応をしないといけないらしい。

「アレクお兄ちゃんと一緒がよかったの……」

遠距離を繋ぐ扉を作る空間魔法――【ゲート】で王城の正門前に転移してきた僕たちを見て、出迎えてくれたエレノアがどんよりとした表情で呟く。

「じゃあ、みんな準備はいいかしら？」

「「はい！」」

「あい！」

保護者役であるティナおばあ様の合図で、僕たちは元気よく返事をして馬車に乗り込んだ。

本日お招きされた貴族家は、王都の貴族街に屋敷を構えているという。

最初に向かうのは、僕の母方のおじい様とおばあ様のお家――グロスター侯爵家。王城からはさほど遠くない。

僕たちみんなは馬車の窓にかじりつくようにして町並みを眺め、短い馬車旅を楽しんだ。

グロスター侯爵家の屋敷は、庭がとても綺麗だった。

無事に到着した僕たちは馬車を降り、玄関へ向かう。

「ようこそ、グロスター侯爵家へ」

「皆様、お待ちしていました」

屋敷の玄関では、おじい様とおばあ様がニコニコしながら僕たちを待っていた。

次期侯爵と思しき男性と、ミカエルよりも小さな赤ちゃんを抱えた女性が一緒に出迎えてくれる。

「皆様、初めまして。嫡男のグレックスと申します」

「グレックスの妻のナオミです。この子は、息子のアーノルドですわ」

グレーの短髪で長身の男性が、嫡男のグレックスさん。栗毛のロングヘアで、とても優しそうな

面立ちをした女性が、嫡男夫人のナオミさんだ。
僕はリズと共に自己紹介をし、そんな二人と順に握手する。
「たっちー」
「あー」
侍従に抱えられたミカエルはアーノルドとハイタッチを交わしており、なんとも微笑ましい。
早速、僕たちはお茶会が開かれる中庭に移動する。
グレックスさん夫妻はお仕事と子守があるようで、屋敷の中へ戻っていった。
「甘いお菓子も用意しているわ。いっぱい食べてね」
「「わあ、ありがとう！」」
用意された席に座ると、おばあ様がニコリとしてお茶とお菓子をすすめてくれた。
リズとサンディはお礼を言い、すぐにクッキーに手に伸ばす。
スラちゃんとプリンも、触手を器用に使いながらクッキーを食べていた。僕も紅茶をいただく。
「くきー、おいちー！」
ミカエルは口の周りをべたべたにしつつも、おいしそうにクッキーを頬張っている。
僕たちのことを大人がにこやかに見つめていた。
「しかし、アレク君とリズちゃんはもう五歳か。出会ってからわずか一年のうちに、本当に大きくなったのう」

「リズ、大きくなった？」
「そうだ。最初にティナ様から紹介された時よりも、ずっと大きくなっているぞ」
「そうなんだ！」
クッキーのカスを口の周りにつけたリズは、おじい様に頭を撫でられている。成長って、自分じゃなかなか実感できないもんね。
僕も実感はあまりない。でも、だんだんと成長していくミカエルを見ていると、おじい様の気持ちが分かる気がする。
「それにしても……アレク君は相変わらずの活躍だ。国内外で大活躍しているのに、おごることがまったくないそうじゃないか。とはいえ、まだ五歳なのだから無理は禁物だぞ」
「アレク君は人を惹きつける魅力に溢れているのでしょうね。これからも友人を大切にするのよ」
おじい様とおばあ様は僕の活躍を喜びつつ、そうアドバイスしてくれた。
きっと身内だからこそ心配なのだろう。これが他の貴族だったら、僕のことをとにかくおだてて気を引こうとするはずだ。
なかなか会いに来られないグロスター侯爵家の二人だけれど、きちんと孫として接してくれる彼らの存在はとても大きいものだった。
一時間ほどお茶を飲みながらいろいろと話をして、僕たちはグロスター侯爵家を後にした。
「「ばいばーい」」

「またお茶会をしましょうね」
馬車から身を乗り出して、おばあ様に手を振る。
今度は、僕とリズの共通の親戚――ブリックス子爵家に向かうのだ。
馬車が下級貴族家の屋敷が立ち並ぶエリアに入った。ほどなくしてブリックス子爵家の屋敷に到着する。
先ぶれの使者を出していたので、屋敷の玄関ではブリックス子爵家のおじ様とおば様が僕たちを待ち構えていた。
「皆様、ブリックス子爵家へようこそ」
「さあ、みんなで中庭に移動しましょうね」
「「はーい」」
「あい！」
おじ様とおば様がニコリとして、僕たちを中庭へ案内する。
ミカエルは新しい人と知り合いになれて楽しいみたいだ。僕と手を繋ぎながらご機嫌で返事をし、とても嬉しそうにてくてくと歩き出した。
中庭では、やはり嫡男夫婦と思しき男女が僕たちを待っていた。
「ようこそ我が家へ。跡取りのジャクソンと申します」
「妻のマリアーナですわ。皆様、どうぞよろしくお願いしますね」

ジャクソンさんは緑色のショートヘアで筋肉質のガッチリとした男性で、マリアーナさんは青いセミロングがよく似合った美人さんだった。
僕たちも順番に挨拶をして、早速用意された席に座る。
「まりちゃ！」
「あら。私の名前を言えるのね、ミカエルちゃん。とても偉いわ」
ミカエルはマリアーナさんに抱っこしてもらって、あれこれお喋りしていた。
彼女はまだ赤ちゃんを授かっていないそうで、ミカエルが可愛いくて仕方ないらしい。
リズ、サンディもジャクソンさんと楽しくお話し中だ。
僕はティナおばあ様と共に、おじ様とおば様に向き直った。
「アレク君はブンデスランド王国でもっとも注目されているが……注目を浴びるほど、逆に狙われる危険性も高まる。その可能性は、常に頭に入れておかねばならない」
おじ様が僕に念押し、顎に手をあてた。
「ベストール侯爵の力が落ちたことで、貴族主義勢力の権力争いが激しくなっております。当分はティナ様たち王家の方々も、事件が起きることを警戒しないとなりませんでしょう」
確かに。僕がこれまで関わってきた各地の貴族領で起こった事件は、貴族主義勢力の争いも絡んでいたもんね。
そういった人たちって、自分たちが一番偉いと思って平民への被害をまったく気にしない。本当

に迷惑な存在だ。
おじ様の発言に呼応するように、ティナおばあ様が口を開く。
「王都での五歳の祝いには、アレク君やリズちゃんだけでなく、エレノアも参加するわ。今年は貴族主義勢力の家の子どもも多いから、王家も悩みどころなのよ」
ティナおばあ様曰く、王家と関係を持ちたい貴族家がエレノアの誕生にあわせて子を為したため、祝いに参加する五歳児が多いのだという。
ところが、肝心のエレノアは僕と仲がいい。貴族の中には、そんな僕を快く思っていない人も多いそうだ。
子どもの成長を祝うイベントなのに……大人の思惑が絡んでトラブルに発展しないことを祈るばかりだ。
今年の王都での五歳の祝いは、例年以上に厳重な警備が敷かれる予定だという。貴族であっても、すべての参加者に手荷物検査が義務づけられるみたいだ。
どうやら貴族主義勢力内での力関係が変わり、新たな台頭を狙っている貴族が出てきたようだ。
不測の事態が起こらないでほしいけど、なんだか望みは薄い気がする。
ともあれ、ブリックス子爵家とのお茶会は無事に終了。
昼食の時間になる前に王城へ戻ったのだけれど……
「みんなと一緒に行きたかったの……」

エレノアがしょぼーんとしながら僕たちを出迎える。
どうやら、来賓対応はかなり大変だったようだ。
これぼっかりは僕にも助けてあげられない。肩を落とすエレノアに、思わず苦笑した。

◆ ◇ ◆

五歳の祝いの日が近づきつつあっても、やるべきことは変わらない。
冒険者活動がない時は、王城にやってきていつも通り勉強しなくちゃいけないのだ。
「「ふしゅー……」」
「ふしゅー……ですわ……」
今日も王城に来て、みんなと一緒に勉強部屋で勉強をしているのだが……机に突っ伏しているリズとエレノア、そしてエレノアの腹違いの姉――ルーシーお姉様と、ルーカスお兄様の婚約者であるアイビー様の頭から、煙が見えるようだ。
本日の家庭教師、レイナさんと魔法使いのカミラさんお手製の問題集を解き終えた直後から、四人はこんな調子である。
「うにゅ？」
ヘロヘロなリズたちのことを、侍従に絵本を読んでもらっていたミカエルが不思議そうに見つめ

ていた。
「ほらほら、みんな。まだまだ問題はあるわよ。サンディはまだ平気って顔をしているじゃない」
レイナさんが苦笑しながら発破をかける。
確かに、ヘロヘロなリズたちに対して、サンディは苦笑いをしつつも普通に席に座っていた。多少は疲れているみたいだが……
「疲れていたらそう言っていいんだよ？」
「ありがとうございます、アレク様。でも、平気です。その……皆様とのお勉強、楽しいです」
サンディは偽ロンカーク伯爵のせいでろくに勉強できずにいた。だからか、こうして大勢と学ぶこと自体が楽しく、苦にならないらしい。
「「私たちは、とっても大変なの！」」
リズたちの反論に、アイビー様も続く。
「大変なのですよ、サンディ！」
ルーシーお姉様は七歳、アイビー様は九歳だから、リズとエレノアが解く問題集よりレベルが高いものを学んでいる。
特にアイビー様は、そこからさらに一段階上の難易度をこなしているはずだから、不満を述べるのも頷ける。
リズやエレノア、ルーシーお姉様だって、年齢のわりにはとても頭がいい。が、今日みたいにたくさんの問題を解くのは嫌いとのこと。
でも、反復練習はとても大切だと思う。これからも問題集を解く運命からは逃れられないだろう。
ちなみに、僕とエレノアの腹違いの兄、ルーカスお兄様はすでに勉強が終わっている。
今日は「会議の冒頭だけ出てくれないか？」と陛下から話があったので、このあと二人で会議室へ移動する予定だ。
カミラさんがニヤリとして言う。
「勉強を終えたアレク君たちは会議に参加するそうだけど……みんなも一緒に出る？」
「「勉強頑張ります！」」
一致団結したリズとエレノア、ルーシーお姉様の返事に、僕もルーカスお兄様も苦笑してしまった。
と言いつつ、僕だってできれば難しい会議には参加したくないのだけど。
そんなことを考えながら、僕とルーカスお兄様は会議室に移動した。
「二人とも、勉強中に悪いな。手短に済ませるから、席に座ってくれ」
「「はい」」
会議室に入ると、陛下が僕とルーカスお兄様を席に誘導した。
すでに閣僚に加えてビクトリア様、アリア様、ティナおばあ様が席についている。そろい踏みし

ている王族の面々を見て、重要な会議が行われることはすぐに分かった。
僕とルーカスお兄様も、姿勢を正して席に座る。
「ルーカス、勉強の調子はどうだ？」
僕とルーカスお兄様の緊張を解すためか、陛下がさっきまでの勉強の様子を聞いてきた。
「僕もアレクもきちんと終わりました。みんな頑張っていますが、サンディは特に努力家で――」
ルーカスお兄様の言う通り、サンディは本当に一生懸命勉強に取り組んでいたもんね。
「そうか、サンディはそんなに勉強ができるのか。本人も頑張り屋のようだし、偽ロンカーク伯爵の乗っ取り事件さえなければ、実の両親の推薦でルーカスの婚約者候補に名前が挙がっていたかもしれんな」
「僕も、父上の意見に同意します。彼女はとても真面目な性格ですから。ただ、本人は婚約者の座に興味がないようですし、これでよかったかなと。アイビーともとても仲良しですよ」
サンディは、偽ロンカーク伯爵が自分を利用してルーカスお兄様とアイビーお兄様の仲を引き裂こうとしていることを当時から察しており、それについてとても申し訳なさそうにしていた。
今はわだかまりなく接することができているようで、何よりだ。
「ふむ。偽ロンカーク伯爵の悪事を暴き、サンディを救ったのはアレクだからな。今は彼に夢中だろう……何にせよ、優秀な人材を救えてよかったと前向きに考えよう」
現在のサンディはリズたち女の子組とも仲が良く、ミカエルもサンディのことを新たな姉として

認識しているようだ。
彼女はとても大人しい性格だけど、コミュニケーションが苦手というわけではない。これからどんどん交友関係を広げていってくれたら嬉しい。
そんなことを考えながら、僕は目の前に置かれた紅茶に手を伸ばす。
それに口をつけたタイミングで、陛下がニヤリと笑った。
「実は、アレクがサンディを救った件を絵本にする計画が上がっていてな。先ほど満場一致で承認された」
「ぶっ……！」
あ、危なかった。
陛下がとんでもないことを言うから、危うく紅茶を噴き出すところだった。
え、絵本？　僕がサンディを助けた時のことを絵本にするの？　すでに国王陛下の承認済み？
僕は会議室にいる面々を見回した。
目を丸くしているルーカスお兄様以外、全員ニコリとしながら頷いてくる。
「どういうストーリーにするかについては、王家の監修を入れる。過剰な贅を欲することがどんなに恐ろしいかを伝えるには、いい教材だ。それに『めでたしめでたし』で終わるのもいいところだ」
至極当然だと言わんばかりに陛下が宣い、またもやルーカスお兄様以外全員がうんうんと頷いた。

僕は助けを求めてティナおばあ様を見た。

ところが、ティナおばあ様はさらにニコリとしながら、もっとビックリすることを言ってきたのだ。

「私も、アレク君がサンディを救った時に同行していたけど……とても素晴らしいことだと思うわ。いい機会だから、アレク君とリズちゃんが『双翼の天使』様と呼ばれるきっかけになった、ホーエンハイム辺境伯領ゴブリン襲撃事件についても絵本にしようかと思っているのよ」

ティナおばあ様からもたらされた追加情報を聞いて、僕は固まってしまう。

慌てて椅子を下り、抗議しようとしたものの……

「たしか、当事者であるサンディやヘンリーの許可はもう取ってあるのでしょう？」

「絵本のシリーズ化については、お兄様……ランンベルト皇帝も乗り気だったわよ。『我が国での一件はいつ絵本にするのか、聞いておいてくれ』って」

ビクトリア様とアリア様が続けた話から察するに、さらに絵本を出す計画があるみたい。

というか、僕以外の関係者にはすでに根回しが済んでいるようだ。

呆然とする僕の肩を、いつの間にか近づいてきたルーカスお兄様が気の毒そうにポンポンと優しく叩く。

……ルーカスお兄様、自分が絵本の題材にならなくてよかった！　って考えてない？

「さて、本題だ。王都で行われる五歳の祝いの件を話そう」

僕が固まっている間に、陛下は次の話を切り出した。
ルーカスお兄様に連れられ、すごすごと席に戻る。
「ルーカスとアレクも知っているだろうが、我が国ではいまだに貴族主義派が怪しい動きを見せている。そのうえ、今回の祝いには過去最多の子どもが参加する。最悪の事態を想定して、厳重な警戒をする予定だ。つい数か月前に、共和国で闇ギルドが暗躍していたように……再びやつらが接触してくる懸念もあるからな」
「そうですね……」
なんとか気を取り直して話を聞き、相槌を打った。サンディの一件は、闇ギルドとは別の犯罪組織が絡んでいたらしい。悪い人たちに狙われてしまっては厄介だよね。
この場にいる全員が陛下の言葉に深く頷いている。対策は万全にしないと。
特に僕は五歳の祝いの当事者だ。リズたちの一番近くにいられるわけだし、いざという時はしっかり守れるように注意しておこう。
僕とルーカスお兄様に伝えたい話は、これでお終いらしい。
会議室から退出することになった僕たちに、陛下が簡単にこのあとの議題を教えてくれた。
天候に恵まれて農作物が豊作だった今年の成果を踏まえた、来年度の税収や、新年に発表する今後の政策などなど……
確かにまだ僕たちには難しい話だ。

僕とルーカスお兄様は顔を見合わせたのだった。
「「戻りました」」
「「「ふしゅー……」」」
僕とルーカスお兄様が勉強部屋に戻ると、再び机に突っ伏しているリズとエレノアとルーシーお姉様がいた。
サンディとアイビー様はなんとか耐えたみたいだが……スラちゃんやプリンがリズたちをツンツンと突っついているのに、三人は微動だにしない。
「二人ともお帰り。アレク君の活躍が絵本になる話が出たのかしら？」
レイナさんは僕とルーカスお兄様を部屋に招き入れながら、とんでもないことを言ってきた。
「「えっ？」」
「「何それ！」」
「私も知りませんわ！」
僕とルーカスお兄様は「なんでレイナさんがその話を知っているの？」という驚きで、がばっと起きたリズたち女の子組は「初めて聞いたんだけど！」という衝撃で、ビックリ仰天の表情を浮かべた。
主の反応につられてか、スラちゃんとプリン、ルーカスお兄様の従魔であるマジカルラット——

オリオンと、アイビー様の従魔――シルクスパイダーのアマリリスまで身を固くしている。
「ティナ様から事前に聞いていたのよ。『今日の会議で、アレク君がサンディを救った話を絵本にする件について、正式に承認する』ってね。それに、アレク君とリズちゃんがホーエンハイム辺境伯領で活躍していることも絵本になるみたいね。私や、カミラとルリアン、ナンシーの魔法使い三人組はもとより、ジンもいろいろ話を聞かれたらしいわ」
そう話すレイナさんのそばでは、サンディがニコニコしている。
やっぱり、絵本の件はいろいろな人が暗躍しているのか……
僕はあれこれ思い出してしまい、再びがっくりとした。
ちなみに、サンディを救う際に一番活躍したのが、従魔組の中で唯一同行していたプリンだ。
絵本では僕に加えてプリンの働きぶりまで華麗に描かれると知らされ、その場にいなかったスラちゃんはかなり悔しがっていたのだった。

◆ ◇ ◆

ブンデスランド王国では王都で開催される五歳の祝いに先駆けて、各領地で五歳の祝いが行われる。
ホーエンハイム辺境伯領も例外ではなく、王都よりも先に五歳の祝いを行うのだ。

そんな辺境伯領でのお祝いが、ついに明日となった。
町中はたくさん飾り付けられていて、かなり華やかな雰囲気だ。
お店によっては露店を出したり、特売をしたりしていて、ちょっとしたお祭りみたいな様子でもある。
そんな中、僕たちの屋敷では別のイベントが間近に迫っていた。
「わあ、お腹がとっても大きいね！」
「ええ、とても！　この中に赤ちゃんが入っているんですね」
リズとサンディが、侍女のお姉さんたち――ハンナお姉さんとマヤお姉さんの大きくなったお腹に耳をあてる。ハンナお姉さんたちは、僕とリズがバイザー伯爵家に軟禁されていた頃のお世話係で、今は僕のお屋敷で働いてくれているのだ。
お姉さん二人は妊婦さん。臨月を迎えてまさに出産の時が近づいていた。
赤ちゃんが動くのを感じたのか、リズとサンディが顔を見合わせてニッコリした。
僕もたまにハンナお姉さんたちのお腹に耳を当てている。リズ、そしてミカエルは二人の妊娠が判明してから、日課のようにお腹の中の音を聞きに行っていたんだよね。
最近は、そこにサンディも加わるようになった。本当に生命の神秘って不思議。
「じゃあ、僕は明日の五歳の祝いの打ち合わせに行ってくるね」
「いってらっしゃーい、お兄ちゃん！」

「「アレク君、気をつけてね」」
リズやハンナお姉さんたちに見送られ、僕はプリンとチセさんを連れてお隣にあるヘンリー様の屋敷に向かった。
ちなみに、ミカエルとオルトは部屋で仲良くお昼寝中なので見送りはなしだ。

ヘンリー様の屋敷に着くと、僕たちはすぐに応接室に通された。
そこではヘンリー様が待っていて、僕とチセさんは彼に挨拶してからソファーに腰かける。
「アレク君、忙しいところ悪いね」
「いえ。みんなでハンナお姉さんとマヤお姉さんの出産がいつかなって話していたところだったので」
「ははは、そうか。二人とも、もうまもなく出産だね。きっと、リズちゃんとミカエルは赤ちゃんが生まれるのが楽しみで仕方ないのだろう」
その様子が容易に想像できたのか、ヘンリー様はニンマリして返事をした。
ホーエンハイム辺境伯家では跡取りであるジェイド様のお嫁さん――ソフィアさんの妊娠が判明したばかりだ。
ハンナお姉さんたちの出産の際には辺境伯家の侍従を遣わし、将来的にソフィアさんの番が来た時、滞りなく進められるか手順を確認することになっているのだとか。

ハンナお姉さんもマヤお姉さんも、僕とリズを小さい頃から育ててくれた特別な侍従。
ヘンリー様はそんな二人のために、「彼女たちが産気づいたら、たとえ夜中であってもすぐに我が家に連絡していいからね」と配慮してくれている。
ソフィアさんも、二人のお姉さんの出産後は赤ちゃんの育児について一緒に学ぶという。
明るい話をして場が温まると、本題――明日に迫ったホーエンハイム辺境伯領の五歳の祝いの打ち合わせが始まった。
この地の領主であり儀式の全貌を把握しているヘンリー様と、侍女兼僕の秘書であるチセさんが中心となって話を進めていく。
教会で儀式を終えたあとは、僕やリズを含む子どもたちと共に盛大にパーティーを行う流れだ。
「――ジェイド様とソフィア様の結婚式と同様、ヘンリー様とアレク様のお屋敷の柵を外す手はずは済んでおります。パーティー開催中の屋敷の警備は増員予定で、すでに騎士団に依頼しております」
「うん。それで構わないよ、チセ。テーブルや料理などの配置は我が家の使用人で行う」
メモを取りつつ話すチセさんを眺め、ヘンリー様が感慨深そうに呟く。
「しかし……アレク君の秘書として、チセもとても成長しているね。学園に通っているエマとオリビアが知ったら、喜びそうだ。これからも頑張って精進するように」
「お褒めいただき、ありがとうございます」

チセさんが立ち上がってヘンリー様に深々とお辞儀した。
僕から見てもチセさんはとても優秀だと思う。
彼女はこの町の生まれで、辺境伯家の面々とも親交が深い。
ヘンリー様もチセさんの成長を嬉しく思っているようで、満足げに深く頷いている。
なお、僕とリズの五歳の祝いの支度はすでに終わっている。服はティナおばあ様が気合を入れて準備した、勝負服だ。
ありがたいことに、ティナおばあ様は「保護者だから」とサンディの服もきちんと用意してくれたんだよね。
ヘンリー様はニコリと微笑み、僕にあることを教えてくれた。
「ホーエンハイム辺境伯領の兵士たちは、アレク君とリズちゃんに治療なんかでお世話になっているからね。『二人のために』と張り切って巡回しているようだよ」
「僕たちのほうがいつも領兵や守備隊の人にお世話になっているのに……でも、そう言ってもらえてとても嬉しいです」
屋敷に帰ったら、リズやスラちゃんにもこの話を教えてあげないと。
その後はお互いの近況などを話し合って、打ち合わせは終了した。
これで明日の準備は万全だ。僕もプリンも少しワクワクしてきたぞ。

◆◇◆

翌朝。いよいよホーエンハイム辺境伯領での五歳の祝い当日だ。
一大イベントが始まる朝というだけあって、みんなウキウキで支度をする……はずだった。
しかし、僕の屋敷は早朝から慌ただしかった。
なんと今朝方、ハンナお姉さんとマヤお姉さんが急に産気づいたのだ。
ヘンリー様のお屋敷から侍従を派遣してもらい、みんな大慌てで出産に備えている。
「お兄ちゃん。ハンナお姉さんとマヤお姉さんの赤ちゃんが生まれるの？」
バタバタしている周囲の様子にリズは少し不安そうだ。僕はできるだけ優しく声をかける。
「ハンナお姉さんたちならきっと大丈夫だよ。さっきイザベラ様が言っていたけど、赤ちゃんが生まれるには時間がかかるんだって。もしかしたら、五歳の祝いをやっている最中に赤ちゃんが生まれるかもしれないね。僕たちは僕たちのやれることを頑張ろう」
ヘンリー様の奥さん、イザベラ様が朝一でやってきて、僕にいろいろと今後の説明をしてくれた。
四人の子持ちである彼女は、お産についてまったく心配していなかった。
僕が言い聞かせているうちに、リズは落ち着きを取り戻したようだ。
「うん……リズ、赤ちゃんが生まれるのを楽しみにしているよ」
「そうだね。ほら、リズも寝間着から着替えて。せっかくティナおばあ様が素敵な服を選んでくれ

たんだから、きちんと着ないとね」
「あっ、そうだった！」
僕が服装を指摘すると、リズはバタバタと自分の部屋に戻っていった。
そばに控えて様子を見守ってくれていた侍女――クロエさんとノラさんが、慌ててリズを追いかけていく。
さて、この隙に僕は王城に行かないと。
今日は僕たちの保護者として、ティナおばあ様が五歳の祝いに出席してくれるんだよね。そろそろ迎えに行く時間なのだ
シュイン、もわーん。
僕は王城のティナおばあ様の部屋の前に【ゲート】を繋いだ。
見送りに来てくれたスラちゃんに手を振り、プリンと共にゲートをくぐる。
部屋の前には待ち合わせの人物……ではなく、綺麗なワンピースドレスを着た三人の女の子が立っていた。
「アレクお兄ちゃん！　エレノアも五歳だからついていきたいの」
「エレノアが行くのなら、お姉ちゃんの私だって行かないとね」
「私はエレノアの未来のお姉さんになるのですから、一緒に行っても問題ありませんわよね。ミカちゃんのお守りが必要ですもの」

今年五歳になるエレノアはともかく……年上でとっくに五歳の祝いを済ませたはずのルーシーお姉様とアイビー様まで、「姉として一緒についていく」と言い出したのだ。
これには僕だけでなく、出迎えてくれたルーカスお兄様も苦笑するばかりだ。
ちなみに、本日の女の子たち三人はもともと用事がなかったようで、同行可能みたい。
残念ながら、ルーカスお兄様はビクトリア様とアリア様と共に公務をする予定とのこと。
さて、どうしたものかな。ここは僕ではなく大人に決めてもらおう。
「じゃあ、みんなで一緒に行きましょうね」
「「やったー！」」
ティナおばあ様からホーエンハイム辺境伯領行きの許可をもらって、三人は飛び跳ねて喜んだ。
もちろん、遅れて到着したティナおばあ様も、淑女らしい落ち着いたデザインのドレスを身にまとっている。
僕はそんな彼女にハンナお姉さんとマヤお姉さんが産気づいたことを報告した。
やはり出産経験のあるティナおばあ様は、「まだ焦る時間ではないわよ」とにこやかに言っている。
エレノアたちが同行することに関しては、ルーカスお兄様、そして控えていた侍従に頼み、ビクトリア様とアリア様に伝えてもらうことにした。
王城から僕の屋敷に【ゲート】を繋ぎ、護衛の近衛騎士と共にみんなでくぐる。

「こんちゃ！」
「アンアン！」
僕の屋敷に着くと、ミカエルとオルトがニコニコしながらやってきた。
ミカエルにとって、王家の子どもたちは「いつも一緒に遊んでくれる優しいお兄さんとお姉さん」だもんね。
「ミカちゃんは、今日もとっても可愛いわね」
アイビー様が笑顔なミカエルをギュッと抱きしめる。
「あー！　私がミカちゃんを抱っこしたかったのに」
「エレノアだって、ミカちゃんを抱っこしようとしてたの」
ニコニコなアイビー様に先手を取られてしまったので、ルーシーお姉様とエレノアはブーブーと文句を垂れる。
ミカエルの体は一つなので、二人には順番を待ってもらう他ない。
「あっ、おばあちゃんだ！　エレノアたちも来たの？」
エレノアがミカエルをハグしたタイミングで、着替えたリズが元気よく駆けてきた。
サンディもリズの後をついてきている。二人ともフリルのついた動きやすいショート丈のドレスに身を包み、可愛らしい。
その姿を眺め、ティナおばあ様は笑顔でうんうんと頷いた。

「ふふ、二人ともとっても似合っているわ。お姫様みたいで素敵よ」
「おばあちゃん、ありがとー！」
「ティナ様、ありがとうございます」
ティナおばあ様に褒められたリズとサンディは、ニコリとしてお礼を言った。
五歳の祝いにお洒落をして臨むのは、何も僕たちだけの話ではない。
今回参加するこの町の子も、めいっぱいお洒落をして教会にやってくる。
この世界は前世の日本ほど医療技術が発達しておらず、子どもの生存率が高くない。
そうした背景もあり、子どもが五歳を迎えることは特別嬉しいんだって。
まだやることがあったので、僕はリズたちと別れて屋敷の庭に出た。
屋敷の庭はすでにヘンリー様の屋敷と僕の屋敷を隔てる柵が外されていて、とても広々としている。
たくさんのテーブルと椅子が並べられており、パーティーの準備が急ピッチで進んでいた。
警備に就く兵士たちも到着し、配置の最終確認を行っているようだ。
庭の中央では、綺麗な貴族服に身を包んだヘンリー様がチセさんと共に使用人に指示を出していた。
「おはようございます。今日はよろしくお願いします」
「おお、アレク君か。綺麗な服を着ているね」

僕の服装を褒めてくれたヘンリー様が、さらに続ける。
「エレノア様たちがいらしたことは陛下から聞いているよ。今日は彼女たちに加えて、この町の司祭とシスターも共に昼食をとることになった。教会から帰る時は、アレク君の【ゲート】で彼らも連れてきてくれ」
ヘンリー様と今日の流れについて確かめる。
もともと、教会からパーティー会場への移動には全員、僕の【ゲート】を使うことになっていた。
時間の問題と安全性を考えてのことだし、この提案には僕もティナおばあ様も大賛成。
他にもヘンリー様と話したけれど……これ以上、準備の邪魔をしちゃいけない。僕はチセさんに「あとをお願いします」と伝え、屋敷に戻った。
教会に向かう時刻になるまで、みんなでミカエルと触れ合って過ごそう。

もうそろそろという時間になったので、僕とリズ、サンディは改めて身支度をする。スラちゃんとプリン、ティナおばあ様も一緒だ。
五歳であるエレノアには、せっかくだから教会での儀式にも参加してもらおう。
「アイビー様、ルーシーお姉様。ミカエルをお願いします」
「任せてください。こちらは気にしなくてよいですわよ」
「そうそう！　弟くんたちは楽しんできてね！」

ミカエルに絵本を読んであげていたアイビー様とルーシーお姉様が、僕のお願いに力強く応える。
僕が教会に【ゲート】を繋ぐと、ミカエルは「いってらっしゃい」と手をフリフリした。
ガヤガヤガヤ。
「わあ、たくさんの人がいるよ！」
興奮した様子のリズが周囲を見回す。
教会に到着すると、すでに大勢の子どもと親が集まっていた。
子どもたちは全員おめかしをしていて、親はみんなニコニコしている。
すると、僕たちの到着に気がついて声をかけてきた人がいた。
「おや、アレク君とリズちゃんじゃないか。エレノアちゃんとサンディちゃんも今日はおめでとう」
いつも森の薬草採取の時に一緒になるドーラおばちゃんだ。彼女はニッと笑って、僕たちを祝福してくれた。
「「ありがとー！」」
顔見知りからのお祝いなので、リズもサンディもエレノアもニコニコして返事をする。
「ティナ様もようこそお越しくださいました」
「せっかくのお祝いですもの。張り切ってしまいましたわ」
ドーラおばちゃんはティナおばあ様にも話しかけた。

二人して、まるで井戸端会議みたいに仲良くお喋りしている。
いつの間にか商店街のおばちゃんたちまで会話に加わり、何やら盛り上がっているけれど……王族が庶民と井戸端会議をしているって考えると、なかなか面白い光景だ。
「おっ、アレクたちも来たな」
「みんな、五歳おめでとうね」
商店街の人も冒険者も、みんな僕たちに声をかけてくる。
僕たちが王族や貴族の子弟や令嬢であってもまったく気にせず、気さくに接してくれるのがちょっと嬉しい。
この町が、とても居心地よいと感じる所以だ。
じー……
そんな中、僕たちのことを訝しそうに見つめてくる視線もあった。
それは、これから五歳の祝いに参加する同い年の子どもたち。
僕たちが町の大人――つまり彼らの親と仲良く話をしているので、少し警戒させちゃったみたい。
「「うん？」」
リズとエレノアが首を傾げ、サンディも困り顔をする。
三人はこちらを警戒する子どもたちを不思議そうに見ていたけど、ちょっとしたきっかけですぐに打ち解けることに。

ピョンピョンピョーン！
「わあ、青いスライムだ！」
「ちっちゃな子もいるよ！」
スラちゃんとプリンが、戸惑う彼らの前に颯爽と現れたのだ。
特にスラちゃんは子どもの扱いに慣れっこ。触手をフリフリとしたり、小さな魔力玉を宙に浮かべたりして楽しませている。
【アイテムボックス】からミカエル相手によく使っている小道具を取り出すと、集まった子どもから歓声が沸いた。
「わー、凄い！」
この【アイテムボックス】は生き物以外のあらゆるものを収納できる便利な魔法で、スラちゃんの場合はリズと食べる用のお菓子をたくさん入れていたりする。
プリンも負けじといろいろ頑張っていると、子どもたちがキラキラした目で二匹を見つめる。
「こっちの青いスライムは、スラちゃんってお名前なんだよ！」
「小さくて黄色いほうはプリンちゃんなの」
「「へえー！」」
リズとエレノアがスラちゃんとプリンを紹介したのをきっかけに、子どもたちの話は盛り上がっている。

もともとリズは物怖じしないタイプで、悪い人以外には人懐っこいんだよね。
「司祭様、シスターさん、おはようございます」
「うむ、おはよう。今年は子どもも多く、賑やかで何よりじゃ」
「そうですわね。こうして、子どもが元気よく明るく遊ぶ様子を見られるのはとてもいいことですわ」
僕が話しかけた司祭様とシスターさんも、スラちゃんとプリンを囲んで楽しそうな子どもたちを微笑ましく眺めていた。
ホーエンハイム辺境伯領は僕やリズが奉仕作業のたびに魔法で治療を行っていたので、他の地域に比べて子どもの生存率が高かったらしい。
僕たちとしては、いつも町の人にお世話になっている分、恩返しのつもりで一生懸命働いただけなんだけどね。
「そんなアレク様とリズ様の行動こそ、ノブレスオブリージュを体現しておりますよ」
司祭様はそう評してくれたものの、僕的にはまだまだだと思う。
しばらくして、司祭様が集まっているみんなに声をかけた。
「さあ、五歳の祝いの準備を始めよう。皆で準備をすれば、すぐに終わるぞ」
「「はーい」」
彼のかけ声で、子どもも大人も一斉に動き出す。

ホーエンハイム辺境伯領では、親だけではなく、主役である子どもも一緒に教会内を飾り付けることで五歳の祝いを盛り上げるらしい。
ティナおばあ様も護衛の近衛騎士と共に準備を手伝っている。僕たちも張り切って支度した。
ほどなくして、教会内の椅子や壁が綺麗な布や花などで装飾された。
特別感がますます高まり、子どもたちもニコニコしている。
儀式に参加する僕たち子どもは一か所に集まり、最終確認をする。
「これを羽織るんだよ」
「お兄ちゃん、ありがとー」
シスターさんからもらった白い布でできたローブをリズに渡す。
神聖な儀式だからか、子どもたちは純白のローブを羽織って儀式に参加するそうなのだ。僕もすでに羽織っている。
すべての子どもの準備が整い、それぞれの席に座ったところで……五歳の祝いが始まった。
「我が主なる神よ、女神よ。日々のご加護に感謝いたします。こうして多くの子どもが健やかに成長することができました。この世に生を受け五年の月日を無事に過ごしてきた子どもたちに、どうか祝福を」
司祭様が神様に子どもの成長を厳かに報告した。
もちろん、参列する僕たちも保護者たちも真剣に儀式の行方を見守る。

シスターさんが順番に子どもの名前を呼び、一人ずつ司祭様の前に誘導していく。
今度は、司祭様が祝福を与えてくださるらしい。
順に子どもたちが前に行き、いよいよ僕の番となった。
僕は司祭様のもとに歩いていき、姿勢を正す。彼はニコリとして僕の頭に手を置いた。
「神よ、女神よ。この者にどうか祝福を与えよ」
司祭様が祝福の言葉を唱えた。そばにいたシスターさんに促され、僕は席に戻る。
僕の隣にいたリズ、そしてエレノアやサンディも順に司祭様から祝福を受けた。
保護者席の大人たちは子どもが祝福を授かる様子を感慨深く見ており、中には思わず涙ぐんでいる女性もいた。きっと、こうして子どもが大きくなるまで、さまざまな苦労があったのだろう。
僕もリズも生まれてすぐに両親を亡くし、バイザー伯爵家のお屋敷に軟禁された。
けれど叔父夫婦に森へ捨てられてから多くの人と出会い、ついには僕たちの両親を知る、ヘンリー様やティナおばあ様と巡り合った。
今はとても幸せに暮らしているけど……本当にここまで波瀾万丈だったな。
すべての子どもが司祭様に祝福されると、五歳の祝いもいよいよハイライトだ。
僕たちは、シスターさんから色鮮やかな花を一輪ずつ受け取る。
「さあ、ご両親に『ありがとう』って感謝の気持ちを込めてお花を渡しましょうね」
「「はーい」」

シスターさんがニコッと笑って合図を出すと、花を受け取った子どもは一斉に保護者のところに向かっていく。
もちろん、僕とリズも。僕はティナおばあ様のところに歩み寄った。
リズは抱きかかえたスラちゃんと共に、ティナおばあ様のもとへ駆けていく。
「おばあちゃん、今までありがとー！」
「ふふ。リズちゃんこそ、こんなに大きく育ってくれてありがとうね」
ティナおばあ様は、花を片手に抱きついてきたリズをギュッと抱きしめた。
スラちゃんまでなぜか花を持っていて、リズと一緒にティナおばあ様にハグしている。
「ティナおばあ様、今まで僕のことを育ててくれてありがとうございます」
「アレク君は、こんな時でも律儀ね。私も、アレク君が大きくなってくれてとても嬉しいわ」
僕も、頭の上に乗せたプリンと共にティナおばあ様に抱きついた。
ティナおばあ様は目に涙を浮かべながら、リズごと僕のことを抱き返してくれた。
「エレノアは、王城に帰ったらアリアに『ありがとう』って伝えないとね。サンディも、時間を見つけてご両親のお墓に花を手向けに行きましょう」
「「はい！」」
ティナおばあ様は、エレノアとサンディにもにこやかに声をかけた。
サンディは現在、ティナおばあ様が保護者となっている。今度両親のお墓まいりに行って、成長

を報告することになりそうだ。
ちらりと周囲を見やると、恥ずかしそうに花を渡している男の子や、お母さんに思いっきり抱きついている女の子がいた。
温かな光景を、司祭様とシスターさんが拍手して祝う。
「さあ、このあとはみんなが待ちに待った豪華なご飯が待っていますよ」
「「やったー！」」
花を渡し終わったタイミングを見計らって、シスターさんが子どもたちに話しかけた。
子どもたちは大喜びで、中には飛び跳ねている子もいる。
リズとスラちゃんも、両手を上げて喜んでいた。
「司祭様、【ゲート】を繋いでもいいですか？」
「うむ、やってくれ」
僕は、司祭様に確認してから【ゲート】を発動した。
場所は事前にヘンリー様から指定されていた屋敷に入る門の前。
僕が魔法を発動するのを見て、「『双翼の天使』様の魔法は凄い」と呟く大人もいた。
「リズがいちばーん！」
「じゃあ、エレノアも行くの」
リズとスラちゃん、それにエレノアが【ゲート】をくぐっていく。他の子どもたちや保護者も

次々と【ゲート】を通った。
最後に僕とプリンが【ゲート】をくぐり、無事に全員、ホーエンハイム辺境伯家の屋敷に到着。
なお、僕を含めた子どもたちはいまだに白いローブを羽織っている。これは五歳になった子に贈られるプレゼントなので、持ち帰っていいことになっているのだ。
とはいえ、さすがにこのまま食事をしたら、何かこぼしたり汚してしまったりしそうだ。僕たちは白いローブを脱ぎ、それぞれの保護者に預けた。
「おお、やっと来たな」
「みんな、おめでとう！」
ホーエンハイム辺境伯領の敷地の外にはたくさん町の人がいて、僕たちの到着を待っていた。
例年は子どもは商店街を歩きながらホーエンハイム辺境伯家の屋敷に向かう。本来なら、その道中で「おめでとう」と声をかけ、お祝いするらしい。
しかし、今年は闇ギルドや貴族主義派の貴族によるトラブルを警戒し、僕の【ゲート】で移動距離を短縮することになってしまった。
例年と違う形になったけど、せっかくだから……ということで、こうして町の人が集まってくれたみたい。僕たちを祝福するためにわざわざ来てくれたのは、凄く嬉しい。
「みんな嬉しそうな顔ね。こうして子どもたちの成長した姿を見届けられるのは、毎年私もとても喜ばしいわ」

屋敷の門の前に現れた僕たちを、ニコニコしたイザベラ様が出迎える。
町の人は「一番のお楽しみを楽しんできな！」と、屋敷の門をくぐる僕たちに手を振った。
やはりリズとスラちゃんが先頭でイザベラ様の後に続き、他の子どもたちも順に庭に入る。
そんな中、スラちゃんが【ワープ】を使って姿を消した。
これは僕の【ゲート】と同じ空間魔法の一種で、別の地点に転移することができる。
【ワープ】したスラちゃんは、どうやらある人を迎えに行っていたみたいで……
「あっ、ルーカスお兄ちゃん！」
「なんとか、僕も食事に間に合ったみたいだね」
王城にいたルーカスお兄様がやってきた。どうにか仕事を終え、駆けつけてくれたようだ。
残念ながら王家の大人たちはまだまだ公務が続くそう。エレノアの母親――アリア様はホーエンハイム辺境伯家に来られず、残念がっていたとのことだった。
それでも、エレノアは大好きな兄の登場でニコニコしていた。
ヘンリー様の屋敷の侍従がみんなを席に案内していく。僕とリズ、サンディは必然的にルーカスお兄様やアイビー様といった王家の面々と同じ席になった。
ミカエルも幼児用の席に座ってスタンバイしており、下ではオルトがちょこんとお座りしている。
使用人が出来立てホカホカの料理を持ってくるたびに、町の子どもたちは「おいしそうだ」と目を輝かせていた。

「ふふ、みんな料理に釘付けですのね。とても可愛いわ」
「『もう待ちきれない！』って気持ちが、よく伝わってくる顔だよね」
アイビー様とルーシーお姉様は、ソワソワうずうずする子どもたちを微笑ましそうに眺める。
期待いっぱいの子どもとは逆に、保護者は豪華な料理に少し怖気づいている様子だ。
今回の食事はすべて無料で、領主たるヘンリー様が手配している。
彼は司祭様やシスターさんと同じテーブルに座っており、あたりを見渡してうんうんと頷いていた。子どもがはしゃぎ、大人が震えるのは毎年恒例の光景なのかもしれない。
あまり待たせてはいけないので……ヘンリー様は飲み物が入ったグラスを手に立ち上がった。
前のめりになっていた子どもも、慌てて姿勢を正す。
「ゴホン。今日は五歳になる君たちが主役だ。今日まで育ててくれた両親に感謝しながら、思う存分料理を楽しんでくれ。では、乾杯！」
「「かんぱーい！」」
乾杯の合図で、子どもたちは一斉に目の前の料理を口にした。
とてもおいしいということは、子どもたちの満面の笑みが物語っている。
「お兄ちゃん、今日の料理は格別においしいね！　おいしすぎてほっぺが落ちちゃいそうだよ！」
僕の隣に座るリズは、豪華な料理を食べていつも以上にテンションが高い。
僕もハンバーグを切り分けて頬張る。とても柔らかいのに肉汁が溢れておいしい。

ときどき両脇にいるリズとエレノアの口を拭いてあげながら、どんどんとお皿を空にした。
周囲にいる子どもの中にはハンバーグをお代わりしている子もいる。使用人は笑顔で対応していた。
ミカエルのためにも特別な料理が作られており、お世話が上手なスラちゃんは彼に小さく切り分けたハンバーグを食べさせてあげている。
「あーん……もぐもぐ。おいちー！」
それはミカエルも両手をあげて歓声を上げるほどのおいしさで、ヘンリー様の屋敷の料理人の腕は凄いと改めて感じた。
僕たち子どもに提供される料理は、最初から小さめにカットされており、とても食べやすい。
大人もホーエンハイム辺境伯家の料理に舌鼓を打っていて、あまりのおいしさにお代わりを頼む人もいた。

無事に食事を終え、子どもたちの何人かは庭で追いかけっこをしている。
僕の屋敷もヘンリー様の屋敷も庭がとても広いから、元気よく遊び回るにはうってつけだ。
ヘンリー様とイザベラ様は、元気よく走り回る子どもたちをニコリと微笑んで見つめていた。
オムツを替えたミカエルは、オルトと一緒に食後の運動をしている。アイビー様とルーシーお姉様が彼の面倒を見てくれていた。

僕とリズは、テーブルから様子を眺める。
そんな時、僕の屋敷からクロエさんが出てきた。
イザベラ様が座るテーブルに行き、彼女とそばにいたシスターさんに何か話している。
すると、イザベラ様がこちらに向かって手招きした。
なんだろう？　リズと一緒に行くと、イザベラ様がクロエさんの話の内容を教えてくれた。
「アレク君、リズちゃん。侍従のお姉さんたちの赤ちゃんがそろそろ生まれそうですって」
「「「「えー!?」」」」
思わぬ話を聞いて、僕とリズだけでなく、近くを通りかかったエレノアやルーカスお兄様まで驚きの声を上げた。
ついにハンナお姉さんとマヤお姉さんの赤ちゃんが生まれるのだと実感した。でも……同時に無事に生まれるのかなと不安にもなる。
心配が顔に出ていたのか、イザベラ様がすぐに言う。
「さすがに、アレク君とリズちゃんは幼いし、部屋に入れられないけど……スラちゃんならいいでしょう。念のため、治療要員として待機していてくれる？　ソフィアや我が家の侍従が手伝っているから、心配はないわよ」
「おおー！　スラちゃん、頑張ってね！」
イザベラ様から仕事を振られて、スラちゃんはなぜか綺麗な敬礼をした。

一緒にいたシスターさんも出産に立ち会ってくれるそう。リズの声援を受け、スラちゃんはクロエさんと共に屋敷の中へ入っていった。

これだけ万全な体制なら、きっと大丈夫なはず。

僕たちがソワソワしていると、ドーラおばちゃんが声をかけてきた。

「アレク君、何かあったのかい？」

「僕とリズを育ててくれたお世話係のお姉さんに、もう赤ちゃんが生まれそうなんです。スラちゃんも治療要員として駆けつけたので、きっと大丈夫だと思います。でも……」

「まあ、そうかい。あたしも、その二人のことは知っているよ。予定日が近いとは聞いていたけど、いよいよか」

ドーラおばちゃんはニカッと歯を見せ、僕の頭を撫でる。

彼女曰く、ホーエンハイム辺境伯領のシスターさんは助産が上手で有名だという。

「心配はいらないよ」と太鼓判を押してくれたので、僕は胸を撫で下ろした。

「赤ちゃんが生まれるの？」

「そーなの！　リズ、とっても楽しみなんだ！」

いつの間にかリズの周りに五歳の祝いで仲良くなった子どもたちが集まっていて、みんなでワイワイ盛り上がっている。

アイビー様もやってきて、ルーカスお兄様と一緒に「ここは大丈夫だよ」と言ってくれたので、

立ち読みサンプル
はここまで

僕はティナおばあ様とプリンを連れて屋敷の中に入った

「ティナ様、アレク君。カミラたちも介助へ向かったし、こちらは万全の体制よ」

廊下を進んでいると、屋敷の中の警備を頼んでいたレイナさんが僕たちを迎えに来てくれた。

レイナさんは、花嫁修業の一環でお産の知識を身につけているみたい。あとで出産用の部屋に入るつもりなんだとか。

それに加えて、スラちゃんやカミラさんたちといった回復魔法を使えるメンバーも集結したとなれば、もう盤石の体制だ。

僕の屋敷には出産や育児に必要な道具はすべて揃っている。ティナおばあ様も問題ないというお墨付きだ。

ソワソワ、ソワソワ。

「ああ、大丈夫かな……心配だ……」

冷静な女性陣に対し、ハンナお姉さんとマヤお姉さんの旦那さんたちは、出産部屋の前をうろうろと落ち着きなく行ったり来たりしていた。

彼らは普段、僕の家の料理人と庭師として働いてくれているのだが……こんなに動揺している姿は初めて見た。

手伝えないから出産部屋に入るわけにもいかず、不安でどうしようもないのだろう。

大の男がうろうろとしていると、とても邪魔だ。二人はノラさんに「応接室へ移動していてくだ